



監督・脚本＝クエンティン・タランティーノ／出演＝ユマ・サーマン／デヴィッド・キャラダイン／マイケル・マドセン／ダリル・ハンナ／ゴードン・リュウ（ギャガ・ヒューマックス共同配給／2004年アメリカ映画／138分）

キル・ビルは徹底した復讐の物語。Vol. 1 での日本刀を振り回すアクションシーンはすごかった。だから梶芽衣子の『怨み節』もよく似合っていたのかも……？ キル・ビル Vol. 2 もそれは同じで、しかもその復讐の旅は最終ターゲットへ……。しかしそのサブタイトルは、花嫁衣装で日本刀を構えるブライドの姿に象徴されるように「ザ・ラブ・ストーリー」。果たしてその結末は……？

## 🎬 2枚の看板写真……

キル・ビル Vol. 1 の看板写真は、黄色に黒の縦線の入ったライダーズーツ姿のブライド（ユマ・サーマン）が日本刀を構えたものだった。これに対して Vol. 2 の看板写真は、純白の花嫁衣装のブライドが日本刀を構えたもの。この違いに象徴されるように、Vol. 1 は、東京の「青葉屋」における「クレイジー88」や「ゴーゴータ張」との対決、そして粉雪舞う美しい日本庭園でのオーレン・イシイ（ルーシー・リュウ）との対決など、大量の血の雨を降らせたものすごいアクションの連続だった。しかし Vol. 2 は……？

Vol. 2 でも、ブライド亡き（？）後、ビルの愛人となっている片目の女、エル・ドライバー（ダリル・ハンナ）とブライドとの決闘をはじめとする、タランティーノ監督好みの「日本刀対決」には迫力があり、面白い。しかし Vol. 2 はサブタイトルからわかるとおり、ブライドとビルとのラブ・ストーリー（？）が底流に流れている。その結果、Vol. 2 の大きな特徴となったことは……？

## Vol. 2の特徴は「語り」……

Vol. 2の最大の特徴となっているのは、「語り」の多さ。まず最初のシーンは、ブライドが惨殺された結婚式場のあるテキサス州エル・パソにあるトゥー・パインズ教会から。まずここで、「語り」とともになぜビルがその信頼する部下であり、愛人であったブライドを惨殺したのかが描かれる。妊娠して大きなお腹をかかえたブライドが、ビルと縁を切って、若い男と結婚……。果たしてビルはそれを心良く承知し、その結婚を心から祝福しようとしたのだろうか……？

また最後のハイライト場面であるブライドとビルとの対決についても、とにかくビルの「語り」が多い。その語りは穏やかで、十分説得力のある(?)ものだが、かなり饒舌。Vol. 1での次々とくり出される驚くべきアクションシーンを観た私には、この「語り」の多さと「間の長さ」がかったるいが……？

## 「生き埋め」シーンの迫力はさすが

Vol. 2での最大のアクションシーン(?)は、生き埋めにされたブライドの生き残りへの執念。ブライドを生きたまま手足を縛って棺桶に入れて、釘打ちによってこれを密閉し、その棺桶を土の中深く埋葬(?)してしまったのは、ビルの弟のバド(マイケル・マドセン)。バドはかつては服部半蔵の日本刀を使いこなすクールな殺し屋だったが、今はしががないストリップクラブの用心棒となり、酒におぼれる毎日。ビルから、ブライドが必ず復讐に来ると聞いていたバドは、意外にうまく(?)ブライドを返り討ちに……。その結果、ブライドは生きたまま土の中に埋葬されることに……。いよいよ万事休すか……？

奇跡的に彼女が助かったのは、1つはバドが恩情をかけて手渡してくれた懐中電灯のおかげ。そしてもう1つは、北京の白蓮寺での厳しいカンフー修行のおかげ……。さて、どうやってブライドは土の中に埋められた棺桶の中から抜け出すことができたのだろうか……？

## 愛嬌のあるパイ・メイ師匠

ブライドが北京の白蓮寺でパイ・メイ(ゴードン・リュウ)師匠に弟子入りし

たのは、ビルのアドバイスと紹介(?)によるもの。この時期の、ビルとブライドとの(愛人)関係は多分ベスト状態だったのだろう。可愛いブライドを手放してまで、その武術の実力を高めようと考えたビルは、ある意味で立派なもの。また、アメリカ人嫌いで女嫌いの武術の達人パイ・メイから弟子入りを許され、苦しい修行に耐え、究極の技を習得したブライドも偉いもの。

ところでパイ・メイとは何者……? 彼は「齢90歳以上の白蓮教の高僧にして地上最強かつ最悪の武道家。過去に少林寺の僧60人をたった1人で虐殺したといわれている」とのこと。そしてその究極の技は「五点掌爆心拳」。これは「敵の体にあるツボを5カ所突くと、突かれた相手は5歩歩いた途端、心臓が破裂する」とのこと。よくまあ、いろいろと考えつくものだ……? このパイ・メイを演じるゴードン・リュウは、『少林寺三十六房』(77年)をはじめとして、数々のカンフー活劇に登場している役者。Vol. 2に登場するパイ・メイはたしかに意地悪だが、その様相を含めて結構可愛いキャラクターで面白い役。いかにもタランティーノ監督好みの演出だ。

## 性悪女のエル・ドライバー

ブライドの「優秀さ」は、エル・ドライバーが同じくこのパイ・メイ師匠の下で修行していた時、お師匠さんに楯突いたためにその右目を「抜かれ」てしまったことと対比すればよくわかる。しかもこのエル・ドライバーは、この恨みから師匠を毒殺してしまったのだから、かなりタチが悪い。さらにこのエル・ドライバーは、ブライドが持っている服部半蔵の刀を100万ドルで買いとるというバドとの「商談」をオーケーしながら、お札を入れたトランクの中に毒蛇を忍ばせて、バドを毒殺してしまうというズルい女。

彼女はもともとは国際刑事警察機構に14年間所属したエリート捜査官だったが、潜入捜査でビルに出会った途端、ビルのクールな魅力のトリコとなって「転向」し、「悪党こそが自分の天職」と悟ったとのこと。顔もキレイだしスタイルも抜群だが、実はものすごい性悪女! こんな女には俺も注意しなければ……?

タランティーノ監督は、女同士の決闘を描くのが大スキ!! Vol. 1でのブライド VS. オーレン・イシイの決闘に続いて、Vol. 2でのブライド VS. エル・ドライ

バーの決闘はハイライト。そしてその結末は……？ ちょっとコワイよ……。

## 最終章の舞台はメキシコ

エル・ドライバーとケリをつけたブライドは、いよいよ車を駆ってメキシコに潜伏するビルのもとへ。いよいよ「最終決着」は近い……。ビルの住む邸宅（ホテル？）へ潜入しようとするブライドの服装がカッコいい。フェミニンな感じの青色のロングスカートに黒い皮ジャケット、そして背中に背負った日本刀というスタイルはかなり異様なものだが、身長の高いブライドにはなぜかこれがバッチリとキマっている。そしてブライドは右手にピストルを持ってビルの部屋の中に踏み込んだが……。そこには、待ち受けていたかのように、ビルとおもちゃのピストルで撃ち合いをして遊んでいるブライドの娘の姿が……。「彼女は知っているのか？ 娘がまだ生きているということを……」。これがVol.1での謎めいたラストの言葉だったが、その意味がここに至ってやっと解き明かされることに……。そして刀とピストルを横に置き、しばらくは母と娘の「ご対面」。2人はベッドの中でゆっくりと語らいを……。しかし娘が眠った後、やはりブライドとビルとの対決は避けることができなかった。さあ、その対決の行方は……？

## キメてほしかったエンディング……？

ビルとの対決に決着をつけ、娘と2人で車を走らせるブライド。ついにこれで彼女の復讐の旅が終わり、これからは平穏で幸せな2人の生活が……？

そんな思いの中、スクリーンにキャストとスタッフの字幕が流れ始めてくる。その字幕とともに最初に流れるのは歌詞の日本語訳がついた英語の曲。それに続いて流れるのは、待ってました！ ご存知、梶芽衣子の『怨み節』。『女囚さそり』シリーズの名曲で、私も最近、時々カラオケでも歌っているほど……。1番から6番までのフルコーラスが流れるから結構長い。したがって、『怨み節』のラストとともに映画が終わる、と思ったらそうではない。さらにそれに続いて字幕とともに次の曲が……。しかしこれがちょっとダサイ……。さらにその上、これで完全に終わったかと思うと、さらに……。とにかく、このVol.2も最後の最後まで観ないとダメだよ……。 2004(平成16)年5月10日記